

ミャンマー 地震と戦闘の中で、支援を届け続ける

2025年3月28日、ミャン

マー中部のザガイン地方を震源とするマグニチュード7.7の大地震が発生しました。パルシクは地震発生直後から支援を開始しましたが、空爆などの攻撃により活動はたびたび中断。

通信手段も絶たれる中、支援を最も必要としている人びとに届けられるよう、スタッフは危険を冒して各地をまわっています。地震の被災地に限らず、ミャンマー各地で空爆や戦闘は継続しており、日々命が失われています。

反政府組織が国軍を排除した地域であっても、空爆や地雷の脅威があるため、多くの人が故郷に帰ることができず避難生活を続けています。パルシクは公立診療所が機能していない地域において、現地のボランティアが運営する簡易診療所へ、医薬品を届けています。地雷や銃撃によって手足を切断せざるを得ない治療に対応するため、必要な医療器具や鎮痛剤も追加で支援しており、「紛争下で生きる」ということの過酷さを活動



地震により倒壊した建物



戦闘による国内避難民へのお米の配付

の中でひしひしと感じています。

2024年11月、国軍最高司令官が中国を訪問し、李強首相と会談しました。中国は軍事政権への関与を強めており、武器や軍事訓練の提供に加え、2025年2月に制定された民間警備サービス法のもと、中国の民間警備会社がミャンマー国内で活動を開始。軍事政権に抵抗する人びとへの監視が一層強化されています。

多くの人がこの危機から逃れるため、タイやインド、バングラデシュなど周辺諸国へと避難しています。タイ国境地域にある移民学習センター（MLC）では、ミャンマーから避難してきた子どもたちが学んでいます。生活の困難や治安上の理由から自宅や避難先で暮らせない子どもたちは、家族と離れてMLCの寮で生活していますが、生活環境は決してよいものとはいえません。

MLCの多くは寄付によって運営されていますが、資金不足のため、希望するすべての子どもを受け入れることができません。教育を受けられない子どもも多くいます。教員の給与も不安定で、多くは農園や工場で働きながら「学びを絶やしたくない」と教職を続けています。パルシクはこうした状況を受け、2025年4月から8校のMLCに対し、教室の修繕や教材・食料・給与支援、教師研修など、各校のニーズに応じた支援を始めました。

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからの寄付で実施しています。）



建設中のMLCの教室

目次

- ミャンマー 地震と戦闘の中で、支援を届ける…… 1
- パレスチナ ガザ 人が耐えられる限界を幾度となく超えて／ヨルダン川西岸 北アシーラでの循環型社会づくり…… 2
- レバノン 停戦の行方——避難と帰還を支える支援／アッカール県 農業支援事業——何よりの収穫…… 3
- シリア 故郷に帰る——暮らしを取り戻すために／東ティモール 花を運ぶ道を自分たちで——コミュニティとの道づくり…… 4
- 能登 地域を越えて集える居場所づくり／みんなふえ フードパント

- リーで広がるつながりの輪…… 5
- フェアトレード 東ティモール 実を結ぶ5年の取り組み、コーヒー豊作の年に／ミャンマーからコーヒーの輸入／スリランカ 広がる有機農業の取り組み／企業連携で社内販売会を定期開催…… 6
- フェアトレード 日々のこと／パレスチナ産マジョールデーツとの出会いと初輸入／ちょっと寄り道！フェアトレードな人びと…… 7
- パルシクからのお知らせ 映画でつながるパレスチナ／大好評の「連続講座」も。YouTubeで公開中！／寄付募集…… 8

■ガザ 人が耐えられる限界を幾度となく超えて

2023年10月7日以降、ガザ地区では少なくとも5万2400人の命が奪われ、負傷者は11万8014人にのぼっています（2025年4月30日時点）。また、ガザの総面積365平方キロメートルのうち、7割にあたる地域がイスラエル軍によって立ち入り禁止区域とされ、住民が強制的に退去させられました。約210万の人びとが残り3割ほどの土地に押し込まれています。この3割の土地も決して安全ではなく、仮設テントが密集する地域や医療施設、炊き出し所などあらゆる場所が昼夜問わず激しい攻撃を受けています。



度重なる避難に加えて自宅も破壊されながら、今もなお羊の飼育を続けるアラさん

この過酷を極める状況下、長引く深刻な物資不足の中でも、パルシックは避難民キャンプで暮らす子どもたち820人に衣料品を提供するとともに、新鮮な野菜や鶏肉を含む食料バスケットの配付など、緊急支援を継続しています。3月のラマダン初日には、ガザ中部にあるアル・アクサ病院と協力し、腎不全患者を支える133

人びとの声

サミラさん

私の夫は14年間にわたり腎不全の治療を受けてきましたが、この絶え間ない攻撃の中では十分な治療を受けるどころか、食べ物を手に入れることさえ困難です。炊き出しに頼る生活ですが、炊き出しは腎不全患者の体には負担となる塩分が多く、夫は日々苦しんでいます。そんな中、パルシックから受け取った食料には、夫の体にも安全な食材が多く入っていて、夫は心から喜んでいました。ガザには今も腎不全などを抱え、極限の状況にある人びとがいます。どうか私たちを忘れないください。



3月1日のラマダン初日に、腎不全患者を支える133世帯に配付した食料バスケット

世帯の家族に対し、少しでも身体に良い食事をとれるよう、市場では入手が困難なりんごを含む食料バスケットを配付しました。また、戦争以前から継続している羊の畜産支援では、ガザの食を支えるため、食肉用の羊を一頭でも多く届けようと、羊農家たちが約200頭の羊を飼育しています。そのうち90頭は妊娠しており、5月上旬には子羊の出産も始まりました。

(吉田)

この事業は、日本NGO連携無償資金協力およびジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。

■ヨルダン川西岸 北アシーラでの循環型社会づくり

ヨルダン川西岸地区のナブルス県北アシーラでは、ごみの分別や生ごみの堆肥化、農業利用に取り組み循環型社会形成事業を実施しています。2024年度からは地域の女性団体と連携し、女性たちとの活動に力を入れています。ガザへの大規模攻撃が続く一方、西岸でもイスラエル軍や入植者の暴力が激化し、特に北部のジェニン県やトゥルカレム県では、4万人以上が家を追われて国内避難民となっています（2025年4月30日時点）。北アシーラでも、イスラエル軍が村の中心部に装甲車で侵入したり、村と

人びとの声

ソマヤさん

堆肥試験場でのワークショップに参加して、台所の生ごみから肥料が作れることを初めて知りました。実験場で試食した野菜の美味しさに驚き、自分でもやってみようと思いました。ワークショップで教わった方法で作った堆肥のおかげで、ブドウの葉も実も美味しく、マハシ（ブドウの葉で肉や野菜を巻いた中東料理）も格別でした。夫も「これは昔食べた味だ」と感動し、庭と一緒に作業をしています。もっと多くの女性にも、この可能性を知ってもらえたらうれしいです。



ワークショップでターメリックの収穫体験をするソマヤさん



堆肥舎で、家庭から回収した生ごみや農業廃棄物が堆肥になる過程を見学するワークショップ参加者

(この事業は、地球環境基金および地球環境日本基金の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)

外をつなぐ道路を封鎖したりするなど、人びとの安全な暮らしや移動の自由が奪われています。

こうした状況下では、大勢を集めたイベントや研修の開催は容易ではありません。それでも、2023年度までの先行事業で建設した堆肥舎や試験場を活用し、家庭の台所から出る生ごみの管理を担う女性たちを対象に、生ごみから堆肥をつくる方法や、それを家庭菜園で活用する方法を学ぶワークショップを、少人数で継続しています。

急速に悪化する経済状況のなかで、家計の助けになること、家族に安全で美味しい野菜を食べさせたいという思いから、ワークショップに参加した後、自ら堆肥づくりに挑戦し始めた女性もいます。

(高橋)

レバノン 停戦の行方 避難と帰還を支える支援

2023年10月から14か月続いたイスラエルとイスラム教シーア派組織ヒズボラとの武力衝突で、レバノンでは人口の4分の1にあたる150万人が、国内の比較的安全とされる地域や隣国シリアへ避難しました。昨年11月27日に停戦合意が発効されて以降、多くの人が避難前の地へ戻りましたが、爆撃がひどかった南部国境地帯では、家が破壊されてしまったために、友人や親戚の家に間借りをしたり、半壊した家で生活したりする人も少なくありません。パルシクは、今年の1月〜2月にかけて、寒さの厳しい中、

人びとの声

南部ナバティーエ県の活動地から

パルシクが活動を行った村の一つシユバア村は、レバノン南部国境沿いに位置し、戦争中はイスラエルによる爆撃で多くの家が破壊されました。支援物資を受け取った女性の一人は、冬場で冷え込む中、爆風の影響で窓とドアのない家で暮らしています。首都ベイルートの避難先から帰還したばかりの男性は「村に戻れても生計手段がなく預金を切り崩して生活しています。ただでさえ必需品の入手が困難な状況なので、食料や衛生用品などの物資はとてありがたいです」と話してくれました。



半壊した自宅で生活する女性



食料と衛生用品を受け取る女性

南部の山間部ナバティーエ県と中部の山岳レバノン県で、帰還世帯および避難世帯あわせて1500世帯に1か月分の食料と衛生用品を配付。加えて、ナバティーエ県の90世帯に毛布やマットレス、549世帯に暖房用灯油を届けました。また、シリア難民の子どもたちが通うバルベック・ヘルメル県の学校に1・5か月分の暖房用灯油を支援しました。

停戦から5か月が経ちますが、南部では今も爆撃が続いています。攻撃により破壊された農地の回復、学校や病院などの公共施設の整備など、市民生活の復興再建への道のりは長いです。その一方で、2025年1月には、2年以上の空白期間を経て新たに政権が発足し、2019年から続く深刻な経済危機と今回の戦争で疲弊した国の立て直しに向けて、かすかながら変化の兆しも見え始めています。

(土橋弘)

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成とクラウドファンディングによるご寄付で実施しました。)

レバノン アッカル県農業支援事業 何よりの収穫

人びとの声

農業活動に参加するシリア難民のニスリーンさん(仮名)

私は日雇いで週2回、畑で働いています。アッカル県では仕事がなく、以前は遠くまで家族のために出稼ぎに行っていました。しかし、この場所なら難民キャンプから歩いて来ることができそうですし、子どもたちと過ごす時間も増えました。農業研修で有機肥料やコンポストなどについても新しく学んだので、自分でも家庭菜園などの新しいことに挑戦してみたいです。クティール マブスター！(アラビア語…私はとてもうれしいです)



冬野菜のズッキーニを植えるニスリーンさん

そのアッカル県で2024年に農業活動を開始しました。参加農家を選ぶ段階から「シリア難民ではなく、もっとレバノン人を雇ってほしい」と村長に言われたり「シリア難民と一緒に働きたくない」と主張するレバノン人がいたり、課題は山積みでした。両者が同じ農地で本当に協働できるのか不安になりました。しかし、野菜を分け合ったり、研修で学んだことを共

有したりするうちに、普段は接点の少ないレバノン人とシリア難民の間に、自然と交流が生まれていきました。農家の皆さんの努力は実を結び、目標としていた野菜の生産高も達成できました。しかしそれ以上に、経済・政治的な理由から距離があったレバノン人とシリア難民が、少しでも近づく機会を作ることができたのが、この事業の「何よりの収穫」になったと感じています。

(中島雅樹)

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しました。)



アッカル県の畑にて、シリア難民とレバノン人農家

シリア 故郷に帰る——暮らしを取り戻すために

シリアでは今、春の花が咲き乱れ、緑色の小麦畑は生命力がみなぎっています。14年にわたる紛争が終わり、人びとはシリア国内外の避難先から故郷へと戻り始めています。しかし、国内の経済は疲弊し、10年以上ぶりに帰還した人びとは、故郷ではほぼ「よそ者」のような状況で、住まいを失った人や仕事を見つけれない人も多く、安心して暮らせるにはほど遠い現実があります。パルシックは2020年からシリアで農業支援の活動をしています。今年のはじめは65年ぶりの少雨となり、農作物にも打撃を与えました。



麦の穂の生育状態を確認する農家

パルシックは、未だに故郷に帰れない国内避難民、そして帰還したものの生活が厳しい人びとを対象に、物資配付、農業支援や小規模ビジネスの起業支援を行い、地域に根ざした暮らしを取り戻す支援を継続しています。例えば、ある2人の帰還民のアイデアに基づき、養鶏とケバブ店を合わせた事業が新し

く開始しました。オープンしたケバブレストラン



ひとりが、北部で避難している間に父親から学んだ養鶏技術をもとに養鶏を担当し、もうひとりが、その鶏でケバブを調理します。オープンしたばかりの店は、村に新たな活気をもたらしています。他には、村の安定しない電気供給に対応するための家庭用ソーラーパネルを設置するビジネスを立ち上げた人もいます。以前は村の外の業者に設置をお願いしていたものが、自分たちの住む村の中で工事の依頼ができるようになりました。事業主によるとソーラーパネルの売れ行きは好調で、このことは多くの帰還民が村での生活再建を目指していることの表れだとのこと。シリアの未来は不確かで、物価変動や村の人たちの購買力の弱さといった課題も山積みです。それでも、こうした一歩が人びとの希望となり、地域の再生につながると私たちは信じて活動を続けています。

(アンソニー)

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからの寄付で実施しています。)

東ティモール 花を運ぶ道を自分たちで「コミュニティとの道づくり

2023年に開始した「女性の生計向上を通じた子どもの栄養改善事業」は、この3月に3年目を迎えました。この事業では、女性たちが栄養に関する知識を学び、花卉栽培からの収入を家庭での栄養改善に結びつけることを目指しています。1、2年目から花卉栽培に参加している12グループの74世帯の女性たちは、雨季のさび病に悩まされながらも試行錯誤を繰り返して、キク栽培を継続してきました。技術のあるメンバーは新たにバラ栽培にも挑戦しています。今年2月からは各地域で集荷を担う人を選び、一時集荷所で品質を確認してから首都デリの生花店やスーパーマーケットに定期的に納品する流れが定着してきました。対象地域では11月から雨季に入り、5月現在も時折激しい雨に降られています。対象グループの中でも特に道路状況の悪い地域に住むグループは、一時集荷所まで花を運ぶために複数の川を渡ったり、ぬかるみがひどい道を歩いたりしなければならず、大変な苦勞です。これらグループのアクセスを改善するために、NP



作業中の道普請人の専門家・田川さんとエンジニアチーム



綺麗に咲いたバラ

○法人道普請人と連携して、道路と水路の補修を開始しています。今回補修を行うのは、過去5年以内に新たに開通した道です。しかし、この地域では大雨のたびに山から水や土砂が流れ込み、地形が常に変化しています。そのため、作業はなかなか安定せず、計画どおりに進めるのが難しい状況です。道普請人による道づくりでは、地域住民が実際に作業に参加することで、道路整備の技術を身につけることができます。それにより、完成後も地域内で道路の補修や管理を継続できる人材の育成につながっています。エンジニアとしてこの事業に従事している現地スタッフたちは、始めは「重機を入れてやった方が早いのに……」と考えていたようですが、道普請人との作業を通じて、機材の利用を最小限にとどめ、地域住民と一緒に整備しながらより長く道路や水路の状態を維持することの重要性を理解し始めているようです。仕事への姿勢に目に見えて変化が現れています。雨の中での作業が続きますが、チーム一丸となって仕事を進めていきます。

(林知美)

(この事業は、日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからの寄付で実施しています。)

■能登 地域を越えて集える居場所づくり

2025年2月から、能登町にある被災して営業を停止していた能登七見健康福祉の郷「なごみ」を町から借りて、居場所づくりに取り組んでいます。震災前のなごみは、地域の人が集う憩いの場でしたが、プールとお風呂が大きな被害を受け営業を停止し、地域住民から再開を求める声が上がっていました。震災の影響で、仮設住宅や町外のみなし仮設に人が分かれ、集まれる場所が減ってしまったため、施設のうち、被害が少ない一部分を借りて、新たな集いの場を開くことにしました。

なごみでは、週5日カフェでランチを提供し、卓球台や運動器具を置いた運動スペース、子どもが遊べるキッズスペースを設け、定期的に交流イベントやフードパントリー（食料配付）を開催しています。



子ども食堂の様子

なごみの活動を応援してくれている
中本安昭さん

震災以前から

なごみに飾っている苔玉は訪れた方からも好評で、近く苔玉教室の開催を予定しています！



なごみの温泉を利用していた中本さん。昨年、能登町の仮設住宅で開催した苔玉教室の講師を務めてくださったことをきっかけに、その後も縁が続いています。なごみを再開する時から、「地元の人々の雇用にも繋がるし、若い人が一生懸命やっていることに、自分のできる範囲で応援したい」と、雪かきをしたり、カフェを彩る苔玉を作って持ってきてくれたり、いつも気にかけてくれています。

ます。近隣の公民館が使えなくなり、活動ができなかった卓球サークルの方が「ここで卓球ができるようになり、毎週の楽しみができてうれしい」と話してくれたり、3月から毎月1回開催している子ども食堂は毎回盛況だったりと、活動が少しずつ広がってきています。区長会や婦人会、イベント等で使いたいといった相談も増え、なごみが人と人が繋がる場、利用した皆さんが前向きな気持ちを持てる場となるよう取り組んでいます。

（小栗清香）

（この事業はジャパン・プラットフォーム、ALAM COSRI社会貢献ファンド（愛称…あすのはね）の助成と皆さまからの寄付で実施しています）

■みんなふえ フードパントリーで広がるつながりの輪

コミュニティカフェ「みんなふえ」は、東京都葛飾区で地域の人びとが気軽に立ち寄れる居場所づくりの活動を始めて、今年で8年目を迎えました。カフェの運営、子ども食堂、フードパントリー（食料配付）、イベントの開催などの活動は、地域の方々やボランティアの皆さんの協力によって支えられ、さらなる広がりを見せています。

なかでもフードパントリーは、昨今のコメの価格高騰や光熱費の値上げといった物価上昇の影響もあり、利用希望が増え続けています。申し込みが60世帯を超えることも多くあり、やむを得ずお断りしなければならぬこともあります。

利用者の方からは「生活が苦しく、少しでも食料がほしい」「高齢で外出も少なく、電気代がささんで困っている」などの切実な声が寄せられています。

お米の寄付が減少する一方で、新たに企業や農園から野菜のご寄付をいただく

上：ミニカフェコーナーでくつろぐ利用者 下：メッセージ付きで届いたお野菜



機会が増えました。定期的にさまざまな野菜を届けていただき、利用者の方からは「今日はどんな野菜があるのか楽しみ」「欲しかった食材がちょうどあってうれしい」といった声も聞かれます。こうした声は寄付してくださる方々にもお伝えしており、「喜んでもらえることが励みになる」との言葉をいただきました。また、フードパントリーでは、訪れる人同士が交流できるよう会場内に「ミニカフェコーナー」を設け、みんなふえのコーヒーや紅茶をゆっくり楽しめるようにしています。こちらでも大変好評で、親子連れや高齢の方など、幅広い世代が集まり、和やかな雰囲気の中でおしゃべりを楽しんでいます。顔見知りでも話す機会のなかった方が、カフェコーナーを通じて談笑する姿もあり、つながりが少しずつ広がっています。

今後は、地域で新しく何かを始めたいという人たちが、みんなふえをそのきっかけの場として使えるように、地域の団体とのつながりをさらに広げていく予定です。（小栗実、遠藤希和子）

（この事業は、中央共同募金会およびこの未来応援基金と皆さまからの寄付で実施しています）



実を結ぶ5年の取り組み、コーヒー豊作の年に

コーヒーの国際市場価格が2025年4月末時点で昨年比1.5倍以上に跳ね上がる中、東ティモールは豊作の年を迎えます。

東ティモールでは例年より早く雨季の終わりが訪れ、4月に入り標高の低い地域から収穫が始まっています。パルシックのカフェ・ティモールを生産するアイナロ県マウベシ郡のコーヒー生産者組合コカマウでは、遅くとも6月には全地域で収穫が始まる予定です。

今年の豊作の要因は、昨年の開花時期にタイミングよく雨が降ったことありますが、過去5年間にわたって実施してきたコーヒー畑改善への取り組みが、少しずつ実を結んでいることの現われでもあります。このまま天候が味方をして、成果をコカマウのみなさんと共に祝えることを期待しています。

ここ数年、収量が安定せず、お待ちいただいているみなさまに十分にコーヒーをお届けできない状況が続いています。一方で、コカマウと築いてきたフェアトレードの関係を他地域に広げてほしいという要望も多く、昨年からはエラメラ県を拠点とする連帯経済連合（FES）との協働を開始しました。小さな島国、東ティモールの多様な味わいを楽しんでいただけたら幸いです。（伊藤淳子）

真っ赤に熟した今年の
コーヒーチェリー



今年収穫したコーヒー豆の天日干し



ミャンマーからコーヒーの輸入



ミャンマーのコーヒー生産者と畑

パルシックは2021年より、ミャンマーで緊急人道支援を行ってきました。クーデター後の厳しい状況下でも、ミャンマーの人びとは生産活動を続けています。中でもコーヒーは重要な収入源の一つです。経済活動を通じて、民主化への道筋を見出すためにも、パルシックが東ティモールでコーヒー生産者と協働してきた経験を活かし、ミャンマーのコーヒー生産者とともに、質の良いコーヒーづくりに取り組みます。2025年度は試験的に約1トンのコーヒーを輸入する計画です。

企業連携で社内販売会を定期開催

企業での社内販売会に定期的にお声がけをいただき、2025年にはいつてからも、3月の国際女性デー、5月のフェアトレード月間に合わせた企画に参加しました。

企業のご担当者と共に工夫を凝らし、産地の様子などの商品の背景を伝えるセミナーやワークショップ、写真展示も同時に開催しています。販売会にお越しくださる方から、フェアトレードの仕組みやNPOの運営などについても深くご質問をいただくことがあり、活動全般の広がりを実感しています。



広がる有機農業の取り組み

2024年6月からスリランカ南部デニヤヤの小規模紅茶農家グループ エクサとともに、有機紅茶の生産性と農家の収入を上げるための5か年事業に取り組んでいます。生産性を上げるには、その土地と茶に適した堆肥づくりと施肥の仕方に変える必要があります。2024年はグループの代表者たちが堆肥づくりや液肥づくりについてのさまざまな研修を受け、その試作と参加農家への普及に取り組みました。併せて、スリランカ政府の紅茶の専門家から畑の茶木の間隔が開きすぎているとの指摘を受け、茶木の苗木を調達し配付しました。

これらの効果が出るには時間がかかりますが、パルシックの現地スタッフが各農家を定期的に回って、茶葉の収穫量の変化を記録し、その成果を共有しつつ農家が直面する課題を聞き取り、その改善に協力していきます。こうした取り組みが地域の農家の関心を集め、事業開始後から15人の農家が新たに、有機農業に取り組み始めました。（西森光子）



エクサの活動に関心を持った農家への説明会

（この事業は、JICA草の根技術協力事業の委託を受けて実施しています。）

パルシクの フェアトレード

パルシクのミッション「人と人が助け合い、支え合い、人間的で対等な関係を築く」という考えをもとに、フェアトレード事業では、商品の生産や流通、消費が市場の価値だけに依存するのではなく「人間的な交流と信用に基づくフェアな取引」を大切にしています。

オンラインショップ パルマルシェ

Par Marche

<https://parmarche.com>

フェアトレード 日々のこと

パルマルシェではこの春より新しいクッキーの取り扱いを始めました。パルシクのスリランカ産の茶葉を使用した「アールグレイ紅茶クッキー」と、そのほか5種類のクッキーを詰め合わせた「みっくすクッキー」です。この2商品の製造をお願いしている「おかし屋ぱれっと」は、障害者総合支援法に基づく「就労継続支援B型」事業として、素朴な味わいのクッキー、パウンドケーキなどの製造販売と地域の方々に向けたカフェ運営を行っています。ぜひお試しください。



オンラインショップ
パルマルシェ



アールグレイ
紅茶クッキー

パレスチナ産マジョールデーツとの出会いと初輸入

パルシクに入職して1年がすぎ、私は今のコーヒーや紅茶以外で、幅広い層の手に届くような商品はないか、そしてパルシクだからこそ取り扱えるものに出会いたいとずっと考えていました。2024年10月、パレスチナスタッフからヨーロッパのフェアトレード団体に輸出しているデーツというドライフルーツがあることを聞き、ぜひ食べてみたいとサンプルの手配をお願いしました。



届いたサンプルはとっても大きくジューシーで、これが平穏な日々とは程遠いパレスチナの西岸地区で作られていることに、素直にびっくりしました。この驚きはきっと、いつも開催している連続講座や報告会に参加して下さる人たち、もしくはパレスチナのことに関心がない人たちにも何か伝わるのではないかと、という

思いへと広がりました。このデーツはパレスチナの地がとても豊かな地であることの証であり、さらに聞けばイスラエルからの入植者を阻止するために植えてきた抵抗のデーツの木であると聞き、なんと重みのある商品なんだろうと、初輸入に踏み切ったのでした。

輸入したデーツは、3月からの2か月でたくさんの方に購入いただき、あっという間の完売となりました。ある程度の安定的な生産、物流状況が確保されてから商品が届くというこれまでのフェアトレードの流れとは異なるデーツの輸入販売ですが、デーツという商品を日本に運び、販売するという具体的な経済活動をすることで、現地の困難さやその地で生きている人びとのことをより理解し、交流できたらと考えています。（嘉村早希子）



和歌山県那智勝浦町の旧色川村に移住した橋本さんが2023年に始めた「百花園」さん。自給的な生活を大切にしながら暮らす人の多い中山間地域で、地域の恵みを生かした家庭規模の農産加工品を通して「この山里からフローできる恵みで地域外の人々と交易する」をコンセプトに活動しています。

パレスチナ情勢のニュースに胸を痛め、「何もできない」と無力感に苛まれていたとき、SNSで偶然見かけたパレスチナ産マジョール・デーツの紹介。「小ロットからでもお気軽に」という一言に背中を押されて初めてパルシクに連絡してみました。

約3か月間の販売期間で、ネットショップだけでなく、地域の仲間たちへの直接販売や地元のイベントへの出店、そして地域の文化拠点であるブックカフェ「らくだ舎」でも販売を行いました。メッセージが伝わるように、パレスチナに関連する書籍も同時に並べて販売しました。お客さまと直接対話のできる販売を通して、「これも1つのデモの形」という実感を持つことができました。さらに「支援」という目的以上に、純粋に「すごく美味しい!」という声をたくさんいただき、自信をもって活動を続けられると感じました。

甘くて美味しいものが持つ力を借りて、柔らかに対話を始められるこのスタイルを来期も続けていきたいです。



百花園橋本さん。デーツのイベント販売の様子



らくだ舎

●百花園

住所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大野2106-1
<https://hyakkaen.base.shop>

●らくだ舎

住所：和歌山県那智勝浦町口色川742-2
営業日：木、金、土曜日

映画でつながるパレスチナ

ガザでの未曾有の人道危機が続くなか、各地でパレスチナの映画が上映されています。これまで日本ではあまり伝えられてこなかった西岸地区でのイスラエル軍や入植者による暴力的な土地の接収の様子をカメラに収めた「ノー・アザー・ランド 故郷は他にない」は、2025年のアカデミー賞を受賞したことで話題となりました。

そんな映画の上映の折りに、「アフタートーク」というかたちで講演を依頼される機会が増えています。アフタートークをきっかけに、パルシックのことを知っていただき、ご寄付をくださる方も多く、サポーターになってくださった方やパルシックのスタッフになった人もいます。映画が持つ力の大きさを改めて実感するとともに、これからもこうした機会に、スクリーンの向こう側の人たちの、今の声を届けていきたいと思っています。



アフタートークで話すパレスチナ駐在員
(C)CINEMA Chupki TABATA



映画館でのパレスチナ月間でデーツを販売

大好評の「連続講座」も。 YouTubeで公開中！

パルシックのオンラインイベントは、YouTubeチャンネルでアーカイブを公開しています。見逃した方も、もう一度見たい方もぜひご覧ください！



@ParcicChannel

2024

2025

- 11.27 〈ミャンマー講座2024〉写真家が見た、ミャンマーで生きるロヒンギア
- 12. 6 〈能登の今を知るオンライントーク 第2回〉「縁をつなぐ力」
～輪島市 重蔵神社に集まる人をつなぎ想いを形にしていこう～
- 12.19 レバノン緊急：停戦後の状況と緊急支援
- 1.30 パレスチナ報告会：10月7日から2度目の冬～ガザ越冬支援とヨルダン川西岸
- 2. 6 〈能登の今を知るオンライントーク 第3回〉「変わらない？日本の災害対応」
災害救助関連法制のなりたちから能登の事例を考える
- 2.13 〈パレスチナ連続講座〉第6回 ドイツとイスラエルー食と農の植民地主義研究を中心として
- 2.26 〈ミャンマーを知るための4章〉第1章 過去の総選挙に見るミャンマーの「民意」
ー英領植民地期から2020年総選挙までの17回を振り返るー
- 3.26 〈ミャンマーを知るための4章〉第2章 2021年クーデターの歴史的背景と現在の状況、人々が
目指す未来ー「法の支配」と「連邦民主制」確立へ向けた「革命的状況」はなぜ生じたのか？ー
- 4.17 〈パレスチナ連続講座〉第7回 エルサレムから考えるパレスチナ問題
- 4.23 〈ミャンマーを知るための4章〉第3章 ミャンマーと日本との関係を振り返る
ー日本占領期(1942-45)、ビルマ米輸入問題、戦後賠償、そしてODAー
- 5.21 〈ミャンマーを知るための4章〉第4章 ビルマ・ナショナリズムの歴史と現在を考える
ー英国の植民地統治期に育まれた「ビルマ民族中心主義」を克服できるか？ー

皆さまのご支援によって支えられています

あなたの寄付でパルシックの活動を支えてください。

みなさまの温かいご寄付をお待ちしています。活動地を選んで、「今回のみ」、「毎月(サポーター)」を選んでご寄付いただけます。詳細は、パルシックのWebサイトをご覧ください。

※パルシックは認定NPO法人です。パルシックへのご寄付・サポーター費は、確定申告によって所得税、法人税、相続税などの寄付金控除を受けることができます。

- クレジットカードでの寄付 Webサイトよりお手続きいただけます。
- 郵便局からの寄付 郵便振替口座：00140-8-536957 口座名義：パルシック
- 銀行からの寄付 三井住友銀行 神田支店(普) 2384136 口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、

ご住所とお名前をご一報ください。

寄付ページ
QRコード



民際協力ニュースは年に2回(6月・11月)にパルシックが発行するニュースレターです。送付の希望、送付先の変更、送付の停止については、office@parcic.org までご連絡ください。

民際協力ニュース VOL.46
2025年6月

特定非営利活動法人 **パルシック** (認定NPO法人)
〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11
東洋ビル1F
電話：03-3253-8990 Fax：03-6206-8906
メール：office@parcic.org
Web：https://www.parcic.org



オンラインショップ ParMarche (パルマルシェ)
https://parmarche.com
X @parcic_office @parcic_ft
facebook @parcic
Instagram @parcic_tokyo @parcicpalestine
YouTube @ParcicChannel